風の超越者

真の自然支配系能力者

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元７２柱４１位フォカロル家に生まれた男は魔力を使わない異端児。

その異端児は、魔王ルシファーとベルゼブブと同じ『超越者』と呼ばれる存在。

これは風と共にある悪魔の物語。

目次

プロローグ　1
1話　10
2話　16
3話　24

プロローグ

太陽の無い紫の空を飛ぶ東洋の黒龍の上で寝ている少年に通信用の魔方陣が展開されて通信主に起こされる。

『ご主人さま、ご主人さま～！起きてます？起きてくださーい！』

「う～ん、今起きた。何か合ったか、リサ」

眷属でメイドでもあり、家の財政を一人で引き受けている万能メイドのリサ。

『先程魔王さまから連絡が来ました。ご主人さまにお願い、ではなく依頼があるとの事です。一度お屋敷に戻って来てください』

通信が切れたので、黒龍に屋敷に戻る様に命令する。

「黒曜、屋敷に戻るぞ」

黒曜は声を出さない為、雰囲気で察しないといけない。

屋敷の上空に着いたので、黒曜から悪魔の翼も出さずに跳び下りる。

地面に接触する直前に風が吹き、少年を浮かして地面に着地する。
「お帰りなさいませ、ご主人さま。魔王ルシファーさまはまた明日のお昼過ぎに連絡するとの事です。ですからフラフラと何処かに行かないで下さいね」
「分かってるよ、リサ」
労う為に頭を撫でると、驚いたのかケモミミ（狼の耳）を出した。
「リサ、一応眷属全員、明日集まる様に言っておいてくれ」
「承りました、ご主人さま」
魔王ルシファー様か……、似た境遇だからって結構しつこく絡んでくるんだよな～。
途中で何故か妹の自慢話になる、そして何処から嗅ぎ付けたのか魔王レヴィアタン様もやって来る。
グレイフィアさんがいるお蔭であまりにも熱中するとハリセンで叩いて抑えてくれる。
アジュカさんとはゲームして遊んだりしているけど。

お願いではなく、依頼……。
どうせ妹と妹の眷属を影ながら守ってとかだろうな。確かリアス・グレモリーとソーナ・シトリーは人間界の学校に行ってるんだったな。

サーゼクスさんの事だ、守るついでに君も学校に通わないか?って言うだろうな。
……たぶん。

／／／／／／／／／／／／／／／／

翌日の昼過ぎに魔方陣が展開され、魔方陣からその姿が現れた。
『ハヤテくん、久しぶりだね。元気にしてたかい?』
「ええ、家族共々元気ですよ」
『それを聞けて安心だ。さて、ハヤテくん……魔王サーゼクス・ルシファーとしてハヤテ・フォカロル。君に依頼がある』
「お聞きします……」
『リアス・グレモリーとソーナ・シトリーとその両眷属の手助けをして欲しい』
守るじゃなくて手助け?
「守る、ではなく手助けですか……」
『そうだ、彼女達では対処が出来ない事が起きたら君の判断で手助けをして欲しい。一応経験を積んでもらう為でもあるから、大事になる前に介入してくれたらそれで良い

よ』

　これはまた、面倒な依頼が来たな。

『君の眷属、あの黒龍以外は駒王学園に入ってもらえるかな？』

　そー来るだろうと思っていましたよ。

「大丈夫ですよ、昨日の内に家族から了承を得ていますので…」

『ありがとう。手続きはこちらがやっておくから準備をしておいてね』

「分かりました。依頼料に関しては、リサが行いますのでよろしくお願いしますね」

『そ、そうだね。彼女にお手柔らかに、と言っておいてくれ』

　クックック…この人もリサの交渉能力を知っているからな。こちらに有利な交渉しかしないから苦笑いしている。

「ええ、しっかりと伝えておきます」

『まぁ、とりあえず。これでリーア達は大丈夫だね。私とアジュカと同じ超越者であるハヤテくんがいれば他神話の主神級以外は相手出来るだろうからね』

「サーゼクスさん、一応まだ候補ですよ、俺」

　大王派の老害どもが認めてないし後旧魔王派も、まだ若い俺に超越者を名乗らせたくないのと……サーゼクスさんとアジュカさんに教えられていたのも原因かな。

　サイラオーグの様に断絶した元７２柱の悪魔の末裔を眷属にしてることか？それと

も全部かな。

『……そうだったね。けど今でもハヤテくんの超越者説が流れているから、その内現実になるだろうけどね』

「レーティングゲームとかすれば直ぐに広まりはするでしょうけど……」

まだ成熟した悪魔とされていないから原則的にレーティングゲームやれないからな、仕方ない。

「そういえば、義兄が言ってましたけど…リアス・グレモリーと婚約したって本当ですか？」

『兄？……ああ、君の女王はレイヴェル・フェニックスだったね。その兄であるライザー・フェニックスは義兄になるか……うん、その通りだよ。父親どうしが酒の勢いで決めちゃったみたいでね』

サーゼクスさんの顔が疲れがメッチャ見えるな。もしかしたらリアス・グレモリー自身は反対しているのか。

恋愛結婚をしたいのだろうか。サーゼクスさんとグレイフィアさんは、恋愛結婚だし。

まぁ、俺も人の事言えないし、眷属の女の子とはみんな関係持ってるし……。

『出来ればリーアも自分で自分の結婚相手を選んで欲しいけど……』

純血主義の貴族達が五月蝿いからな。
その内貴族社会に叛逆が起きそうだな。
『ああ、ごめんね。君に愚痴を吐いてしまって。詳しいことは書面を送るよ。じゃあ、今日はこの辺で失礼するよ』
そう言って魔方陣は消えてしまった。

＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼＼

夕飯を食べ終え時刻は夜七時。
屋敷の一室で眷属（家族）が全員集まった。
ちなみに俺の首には、小さくなった黒曜がいる。
「みんな、駒王学園に入学する事になりました」
「ああ、やっぱりそうなったか」
一人目の戦車、グレン・マルコシアス。
「オレは大将と仲間が一緒ならそれで良いぜ」
二人目の戦車、坂田金時。本名は雷斗。
「俺もアニキとみんながいればそれでいいっすよ！」

駒二つ消費の兵士、愛宕炎摩。
「ボクもそれで構わないよ」
一人目の騎士、エル・ワトソン。
「あたしもそれでいいよー」
二人目の騎士、瀬尾なずな。
「僕も学校に行ってなかったからね丁度いいよ」
一人目の僧侶、染木文弥。
「私もそれで構いません」
二人目の僧侶、山奈ミラ。
「拙者は主君の命に従うのみ」
兵士の望月千代女。本名は陽葉。
「ご主人さまがいる所にメイドありです」
兵士のリサ・アヴェ・デュ・アンク。
「……」
「黒曜の旦那もいいってよ」
駒四つ消費の兵士、黒龍の黒曜。
「ハヤテ、魔王様からの依頼とは何だったのですか？」

女王のレイヴェル・フェニックス。
「グレモリーとシトリーの手に負えない問題が起こった場合、大事になる前に介入して問題を解決する……という手助けの依頼だよ」
「大将、オレらが前出ちゃいけねーのか？」
「経験を積ませたいんだと……」
難しい顔をしているな。雷斗は、根っからの善人だから。
「俺は、お前らを縛るつもりはない。魔王様は、俺の判断に任せると言った。だから俺はお前ら家族に言う。各々の判断で介入して手助けしてよし！」
「おう！それでこそオイラ達の大将だ！」
「流石はアニキ！」
「まあ、そう言うと思ったよ」
「主君の命とあらば」
「戦闘組に任せるよ、僕はいつも通り裏方で行かせてもらうよ」
「私もどちらか…と言えば…裏方ですけど……」
「あたしも裏方でいいよー」
「なずなは、ボクと同じ騎士でしょ。キミも戦闘組だよ」
「リサは後方支援ですよ」

「私も後方支援にさせていただきます。弱い女王で申し訳ありませんが……」
ネガティブな事を言うレイヴェルの頭を撫でて落ち着かせる。
「レイヴェル良いなー。ハヤテ、あたしも撫でてー！」
「ボ、ボクも良いかな……」
「わ、私は……」
「落ち着けみんな。とりあえず、向こうに持っていく物をまとめておく様に、今日はこれで解散だ」

それから女の子全員に満足するまで頭をなでなでした。

1話

列車に揺られて数時間。歩く事数分。
魔王様に用意してもらった家に着いた。
直ぐに、文弥とミラに呪刻と結界を敷いてもらい、荷物を転送して荷物を片付けて行く。

明日から学園に行くことになっているため、みんなに程々に片付けて休むように言い、明日に備えて寝た。

学園では俺は風祭颯天（かざまつりはやて）と名乗り高等部二年に転入した。
眷属は、高等部一年と二年で別れて転入した。
俺と同じ二年は、グレン・マルコシアス改め緋山紅蓮、母親の旧姓を名乗っている。
瀬尾なずな、エル・ワトソン、山奈ミラ、染木文弥、リサ・アヴェ・デュ・アンクが

二年に。

レイヴェル・フェニックス、坂田金時(雷斗)、愛宕炎摩、望月千代女(陽葉)が高等部一年に転入することになった。

放課後、黒曜以外の眷属を連れてリアス・グレモリーのいる旧校舎に向かう。

「失礼するぞ、グレモリー」

「あなたは確か……フォカロル家の……」

「ああ、そうだよ。グレモリーの眷属はここにいるので全員か?」

「ええ、ここに居るのが私の下僕たちよ」

下僕ね……。

俺は下僕呼びが嫌いだ。

眷属のことをステータスだの物扱いしているみたいで嫌な気分になる。

「部長、誰ですか?この人たち……」

「俺は、グレモリーと同じ上級悪魔、元72柱41位フォカロル家次期当主のハヤテ・フォカロルだ。今日この学園に転入した。学園では風祭颯天と名乗ってるからそのつもりでな。俺の後ろにいるのが俺の家族、眷属たちだ」

「初めまして、女王のレイヴェル・フェニックスです。高等部一年に転入しました。よろしくお願いいたします。」
「高等部二年、戦車の緋山紅蓮だ。悪魔としての名はグレン・マルコシアス、元７２柱３５位マルコシアス家の血を持つ者だ」
「騎士の瀬尾なずな。悪魔としての名前はナズナ・オセ。オセ家の末裔だよー。後、高等部二年よろしくー」
「オレは、戦車の坂田雷斗だ。高等部一年だヨロシク頼むぜ」
「僧侶の染木文弥。高等部二年だよ」
「同じく僧侶の山奈ミラです。高等部二年です、よろしくお願いします」
「兵士でご主人さまのメイドをしています、リサ・アヴェ・デュ・アンクです。高等部二年です。」
「主君の兵士、望月陽葉。高等部一年……」
「ボクは騎士のエル・ワトソン。高等部二年だよ」
「高等部一年で駒二つ消費の兵士の愛宕炎摩っす」
「後ここにはいないがもう一人、いや、一体か？が俺の家族だ」

何だ？あいつ、俺のことをメッチャ睨んでるのか？何かしたか俺？

「まさかフォカロルの異端児が断絶した御家の悪魔を下僕にしていたなんてね」

「グレモリー、異端児は構わんが俺は眷属のことを下僕だなんて思った事はない。俺の大切な家族だ。俺が居る前で眷属を下僕と呼ぶのは止めてくれ。後、断絶した御家だから何だって?その言い方は俺だけじゃなくサイラオーグにも喧嘩売ってる様にしか聞こえんぞ……」

「あっ……ご、ごめんなさい。配慮が足りなかったわね」

「気を付けな、サイラオーグは笑って流すかもしれんが、俺はそうでもないからな……」

ほんとにな、サイラオーグは笑って流すか闘気を出すかするかもしれないが、俺はそこまで我慢強くないからな……。

「今日はただの顔合わせだからな、そろそろ帰るよ」

そう言って、みんなと一緒に家に帰った。

「部長！良いんですか、アイツに言い様に言わせて！」
　ハヤテの言動に怒る兵藤一誠。
「落ち着きなさい、イッセー。彼は眷属のことが大切だからそう言ってきたのよ。今回は、彼の琴線に触れる事を言ってしまった私が悪いの。それに……」
「それに、何ですか部長？」
「え、ううん。何でもないわ。彼は冥界では色々と言われているから」
　言えないだろう……もしかしたら親戚の関係になる可能性があるなんて……。
「そう言えば、異端児って言ってたのもそれなんですか、部長さん？」
　元シスターの僧侶、アーシアが疑問を口にする。
「ええ、そうよ。さあ、今日もお仕事するわよ」

「文弥ー終わった？」
「うん、一応学園に魔方陣とか仕掛けられても発動を遅らせられるよ」

「ありがとな、やっぱり専門家に任せるのが一番だな」
家に帰る途中で文弥に頼んで呪刻を刻んだり、魔方陣などの力を破壊するための仕込みをしてもらった。
「でも良かったの？勝手に色々して……」
「一応、依頼に沿う形だからな、魔王様方には何も言われんよ」
「ハヤテ、その言い方だとリアスさんやソーナさんに色々と言われると言ってるモノですわよ」
「そうだよハヤテ。特にさっき会った赤龍帝が怒るかも知れないよ。さっきだってハヤテの事を睨んでたよ、彼」
レイヴェルの言葉に合わせる様にエルが忠告してくる。

赤龍帝の心の中はイケメンのハーレム野郎、と羨ましいと思う理不尽な怒りだった事を誰も知らない。
いや、中にいる赤い龍はそんな宿主に呆れていたかもしれない。

2話

翌日の昼休みの時間にレイヴェルと一緒にソーナが居る生徒会室で話をした。

「お久しぶりですね、ハヤテ、レイヴェル」
「そうだな、そろそろ半年は経つか？」
「ソーナさん、あれから確りと練習していますか？」
「ええ、眷属のみんなに美味しいと言ってもらえる様になりました」
「本当ですか?!おめでとうございます！」

何の練習かと訊かれればこう答えよう、お菓子作りの練習だと……。
ソーナの作るお菓子はハッキリと言って、神すら殺す兵器になりえる物だった。
実際、死にかけた。

お菓子作りが趣味のレイヴェルが怒って叱り、レイヴェル監修のお菓子作り指導が行われた。サポートにリサもいた。

端から見ていたシスコン魔王はソーナのお菓子を知っていたため、心を鬼にして見守っていた。

まぁ、最初は怒っていたがレイヴェルに説き伏せられていたけど。

ソーナの美味いお菓子を食べたくないのかと……。

その言葉でなんとか鎮まってくれた。

「ハヤテ、今回の転入の本当の理由は何ですか？」

「理由も何も家族が学校の話をするから興味を持ったんだよ」

「嘘では無いですが本当ではありませんよね？放浪癖のあるハヤテが一ヵ所に留まろうとは思えませんし、以前、私とリアスが学園に行く事にした時、お姉様とサーゼクス様がハヤテの事も誘っていたのに誘いを蹴っていたのは知っています。『超越者』であるハヤテが転入せざるを得ない理由が出来た、と考えるのが一番しっくりと来るのですがどうですか？」

勝ち誇った笑みでこちらを見てくるソーナ。

隣のレイヴェルが苦笑いしている。

グレモリーと違ってソーナとは交流が多かったのが原因かな？

俺の性格を熟知出来てるから出来る推理だな。
レイヴェルと婚約しなかったらソーナと婚約していたかもしれないぐらいには仲は悪くはなかったからな。
超越者の事を知っているのは俺が喋ったからだし。

「はぁ～……。参ったよ、ソーナ。流石、と言っておくよ」
「良いのですか、ハヤテ？」
「頭の良いソーナだけなら構わねーだろ。俺の実力を知ってる事でもあるし」
「やはり私の推理は当たっていたのですね」
「そりゃー最初っから最後まで全部当たってたからな！ククク、笑いを堪えるのに必死になっちまったわ！」
二人とも同時に溜め息を吐く。
しょうがないだろ？全部本当の事だったんだからよ。

「それで理由はなんなのですか？」
眼鏡の位置を整えて訊いてくる。
「言っておくがソーナ、誰にも言うなよ？特にグレモリーにはな、絶対難癖つけてくるだ

ろうからな。……ルシファー様から依頼を受けてな、ソーナとグレモリーが対処出来ない問題が起こった場合、大事にならない様に手助けしてくれって言われたんだよ」
「確かにリアスには言えない内容ですね……」
「だろ？」

昼休みの時間が終わりかけていたので話を終えて教室に戻ることにした。

授業が終わり放課後になったため、リサと一緒に買い物に行く事になっていたのでリサを連れて出ようとしたら、聞き覚えのある怒った声が聴こえてきた。
「ごしゅ……ハヤテ様、今の声って雷斗さんのですよ」
「見に行くぞ。アイツが怒るって事は許せない事があったんだろうな」
雷斗が神器と雷を使ってない事を願うよ。

野次馬が出来てるなぁ～……騒ぎの収拾出来るか？

「グレン何があった？」
　野次馬の一人になっていたグレンに何があったのかを訊く。
「ハヤテか、俺もさっき来たばっかでよく分かってないんだよ。……雷斗が怒るって相当なことだろうってことは分かるけど……」
「……そうだな」
　茶髪赤眼の兄貴って風貌なグレンの言葉に同意する。
「しゅ……ハ…ヤテ先輩」
「陽葉…雷斗は何に怒ってんのか知ってるか？」
「はい、私は雷斗と一緒に居りましたので分かっています」
　主君呼びが抜けない陽葉の言葉を聞く。

　陽葉の話によると、高等部二年に変態三人組と呼ばれる男子生徒が居り、女子の目の前で猥談したり、女子更衣室を覗く等を平気で行い、反省せず何度も繰り返していてそれが悪いことだとも思っていない様子らしい。

騒ぎの発端は、その三人組がまたしても女子更衣室を覗いていたのがバレて、女子から逃げていた所を雷斗と共に見つけて、被害に遭った女子生徒に事情を訊いたところ雷斗が怒って三人を取っ捕まえたらしい。

その後、雷斗が三人にそういう事を止めるように言っても聞く耳を持たない事で言い争いをしているのが騒ぎの全貌らしい。

そろそろ騒ぎを治めた方が良いな。

野次馬をかき分けて前に出る。

「雷斗そろそろ帰るぞ」

「た、大将?!す、すんません！騒ぎ起こしちまって……」

やっぱり、雷斗は根っからの善人だな。

心優しい自慢の家族だな。

「心配すんなって、俺は雷斗が間違っていないって分かってるからな」

雷斗から今回の騒ぎの原因の三人を見る。

その場から直ぐに去りたい衝動に駆られた。
三人組の一人が昨日見たグレモリーの眷属の赤龍帝だったからだ……。
グレモリーの奴、眷属の愚行を黙認しているのかよ……。
被害に遭ってる女子の記憶消してるか、金でも渡してんのか？
ダメだろ……あぁ、イライラして来た……。
「おい、アンター！ソイツをとっとと連れてけよ。俺達の邪魔をすんなってちゃんと言っておけよ」
「先輩に対しての口の聞き方も言っておけよ、ソイツお前の舎弟だろ！」
「我々の行いに口を挟まないでいただきたい」

……雷斗に言われても何にも感じないのかこいつら？

さっきまで吹いていた風が――――

――――――――無くなった。

近くに居たフォカロル眷属全員に冷汗が流れる。
王であるハヤテが怒ると、どんなに風が強くても風が不自然なほど一瞬で消える。
その現象が起きた事に焦る。
怒っていることが分かるから。
ハヤテが殺ろうと思えば、相手を一瞬で塵に出来るから。
緊張が走る眷属に救いの女神(悪魔)がやって来た。

「ハヤテ?どうしたのですか?リサと買い物に行くのでは?」
女王のレイヴェル・フェニックスが来てくれたのだ。
「ああ、大丈夫。今から行ってくるよ」

また風が吹き始めた事に家族は、レイヴェルにサムズアップをし、眷属がレイヴェルに頭が上がらないことが増えることになったのを本人は知らない。

3話

放課後の一件でイライラが溜まってきたので、夕飯を食べ終わった後、雷斗、グレン、なずな、エル、炎摩、黒曜を連れてフォカロル領の山に転移した。

この山は、俺らの修行の場所になっている。
町からはかなり離れているから暴れても迷惑がかからない。
みんなにバトルロワイアルで闘い、最後まで残ったヒトにお小遣いアップを提示してストレス発散を兼ねた闘いをして貰った。
各々神器や自身の力を最大限に使ってバトっている。

俺は、黒曜に作って貰った影を相手にしていた。
バラバラにしても、黒曜の力で具現化させているだけなので、誰も怪我とかしないから便利。
家族一同、黒曜の力に感謝して修行している。

一時間くらい経って、バトルの勝者はエルだった。
そういえば、エルの神器ってかすっただけでも効果あるんだっけ。
状態異常を引き起こすエルの神器は今回の勝負にはうってつけだったな。
エルにアップした分のお小遣いを渡して帰ることとなった。

あれから数日が経ち、俺は何故かグレモリーに呼び出された。

「フォカロルくん、君に頼みたい事があるのだけど……」
「聞くだけ聞こう、頼みを受ける受けないは、それからだ」

話をまとめると、ライザー義兄さんと婚約の件でレーティングゲームをすることになった。
レーティングゲームまでの十日間山で特訓をする。

その特訓に俺と家族を巻き込んで、レベルアップを図りたいと……。
ハッキリと言おう。

「ムリだ」
「り、理由を訊いても？」

即答気味に答えたので、言葉を詰まらせてる。
受けるとでも思ってたんだろうな……。

「理由は簡単だ。一応、まだだがフォカロルとフェニックスは親戚関係だからだよ。
……と言うか、俺の家族、眷属の女王が誰だか知らない訳じゃあないだろ？」

「そ、それは……」
分かってて言ってたのか……。
「手伝う義理も義務もない。例え有っても辞退するけどな」
手伝う義理があるのはグレモリーではなく、その兄であるサーゼクスさんだ。
「な、何でだよ!?別にいいだろやったって！」

「お前がいるからだよ、兵藤一誠」
「何で俺がいるからだよ！理由になってねーだろ！」
「俺にとっては十分な理由だ。お前が行う行動は目に余る。嫌がる女子生徒がいるのに何度も覗きを繰り返す。叱られても反省しない、反省するどころか自分の覗きを正当化して逆ギレする。赤龍帝だから悪魔だからって理由で逃げんじゃねーぞ。ヒトとして当たり前の事すら出来てもいないお前が言うなよ。グレモリー、眷属の愚行を黙認するなよ。冥界は、赤龍帝を眷属にしたお前に注目している、その事を忘れるな 」
他のグレモリーの眷属はみんな苦笑いしているぞ。少なからずお前の行動に呆れていたのだろう。
今にも突っ掛かってきそうに、震えている赤龍帝を一瞥して、さらに思っていた疑問をグレモリーに訊く。
「それとグレモリー、お前さんの話を聞いて思ったんだが…十日も駒王町から離れるのか？」
「そのつもりだけど……」
マジかよ……。ソーナから聞いた話じゃあはぐれ悪魔や堕天使とかが侵入してたん

だろ。
警戒心とか無いのか？
……と言うか、堕天使放置した結果が赤龍帝とシスターが死んだんじゃねーのか？
気づいてないのか……？

「管理者が管理地離れて大丈夫なのか？居てもはぐれ悪魔や堕天使が侵入していたが……まさか、使い魔だけ置いていくつもりか？」
「そ、そうだけど……」
「……出過ぎだと思うが、十日間は俺と家族が町をパトロールするが良いか？手を貸す事は出来んけど、その方が特訓に身が入ると思うがどうする？」
悩んでいるな。
俺の様な異端児に貸しを作りたくはないだろうからな。
そもそもグレモリーって町のパトロールとかしているのか？悪魔業ばかりで疎かにしてないよな？

「町のパトロール、お願いして良いかしら」

「任された。ああ、後、この程度で貸し借りを作るつもりはないから安心してくれ。それじゃあ、俺は家に帰って家族に報告しないとな……」

旧校舎を出てすぐに、家まで翔んだ。

家に帰ってみんなに報告したら男性陣からは小遣いアップを女性陣からは一人ずつデートを要求された。

ソーナの方にも一度連絡しないとな……。

十日間ローテーション組んで見廻りしたが異常なしで終わりを迎えた。